

「ばあちゃんの地図」

ばあちゃんは今日もウトウト寝ている。ピカピカ光る薄い手の皮をそとつとつまむとピ
ローンと伸びたので、雄太はおもわずクスクス笑ってしまった。ばあちゃんが目を覚ま
した。

「アイ、雄太、健ちゃん、お帰り。外は暑かったでしょう。冷たいお茶を飲んでくるね
え」

雄太は、ばあちゃんが大好きだ。お父さんもお母さんもいつも忙しく働いて、
帰りがおそい。中学生の兄ちゃんも雄太を子ども扱いして相手にしてくれない。この
間なんか、部活で走っているのを見かけて「兄ちゃん！」と声をかけただけで、怒ら
れてしまった。

「これから外で兄ちゃんを見ても、ぜったいに声をかけるなよ。俺が恥ずかしいからな。
いいな、ぜったいだぞ！」

雄太にはまったく分からない。お母さんは「思春期なのよ、兄ちゃんは。ほっときなさい」と言うけれど、雄太は兄ちゃんがちよつぴり嫌いになった。

雄太は小学校四年生。健ちゃんと2人で、雄太のばあちゃんが入所している若竹荘に寄り道する。健ちゃんは「おやつも、冷たいお茶もあるし、おまけに宿題まで手伝わってもらえるから最高!」と、喜んでつきあってくれていいやつだ。

「おつ、ホームのヒーロー、雄太と健一くんのおでまし。今日の宿題は何かな?まさる、このお菓子おいしいよ」と、ツルツルの頭をなでながらおやつのかきもちを持ってきたのは、宮城のおじいちゃんだ。時々雄太のことを孫のまさるくんと間違えるけど、何でも教えてくれる物知りのおじいさんだ。

「ぼくは、君たちの先生だよ。夏休みの宿題はまかせなさい!」と、宮城のおじいちゃんは胸をはった。車いすを押しながら食堂に入ってきた介護士の美菜子さんが、

「あら、反対じゃないですか?宮城さんはどなたに本を読んでもらっているのですか?」と、笑った。テーブルの周りのおじいちゃんやおばあちゃんたちからも、ドツと笑い声

がおこった。雄太たちが借りてきた図書館の本を、みんな楽しみにしているのだ。

「ばあちゃんね、雄太がお母さんのお腹にいた時から、いっぱい本を読んできたのよ。だから、ばあちゃんの声は雄太の子守り歌！」

でももう、ばあちゃんは本が読めない。雄太のばあちゃんは心臓が悪いし車いすだ。あまり無理はさせられない。だから今は雄太がばあちゃんのために本を読む。

「ばあちゃん、元気になったら何がしたい？」

「雄太の学校にいきたいねえ。ほらっ、運動場のすみに大きなデイゴの木があるでしょう。あの木は、ばあちゃんたちが小学校の卒業記念に植えたんだよ。戦争で島じゅうがまるはだかだったからねえ・・・」

そしてばあちゃんはクスクス笑った。

「ばあちゃん、食いしん坊だったよ。大城商店の魚てんぷらを食べたいさあ。雄太ぐらいの年に母ちゃんと初めて市場に野菜を売りに行った帰り道、お腹がとつてもすいてね。行きも帰りも歩いてだったから・・・。大城商店からとつてもいいにおいがするわ

け、昔は魚てんぷらはぜいたくなごちそう、めったに口にはいらなかったよ。お腹がグウグウなって、母ちゃんが「今日は頑張ったね、ごほうび」って。おいしかったよ。それから、ばあちゃんは遠くを見るような目で言った。

一番行きたい所は、やっぱり村の公民館の向かいのモウかな・・・」

「モウ？ばあちゃん、モウってなに？」健ちゃんが牛の鳴き真似をして言った。雄太の耳の中でも、一頭の牛が大きな声でモウツと鳴いた。ばあちゃんは笑いながら、

「健ちゃん、牛のモウじゃないよ。ちよつと小高い草のしげった原っぱのことを、方言でモウって言うさあ」と、教えてくれた。

雄太の村では、旧暦の六月十五日に綱引きをする。害虫退治と豊作を願うとても大事な行事だ。綱引きの終わったあと、公民館の向かいの原っぱ、ばあちゃんのいうモウで村じゅうの子どもが参加する『こども相撲大会』が開かれる。雄太も健ちゃんもけっこう強い。

「ばあちゃんは、相撲強くてね、男の子投げとばしていたよお。あそこからは、家も畑

もみんな見える。村もずいぶん変わったけど、遠くから見おろしたら、昔と変わらんさあ。道も川も山も同じ所にあるさあね。でも坂道上らんとね、この足がねえ・・・」と、ばあちゃんは淋しそうに足をなでた。

「ばあちゃん、おれが車いす押してつれてつてあげる。夏休みになったら行こうぜ！」

「おれも押してあげるよ、ばあちゃん。雄太、おれたちの自由研究はこれにしようぜ。」

『ばあちゃんの地図』に決定！』

「ばあちゃん、夏休みまでにいっぱいご飯を食べて、元気になってよ」

「楽しみが増えたさあ。雄太、健ちゃん、ありがどうねえ。たくさん食べて体力つけておかんとね、がんばるよお」

待ちかねていた夏休みがやってきた。兄ちゃんは、毎日部活で忙しい。お父さんとお母さんも仕事だ。雄太はお父さんに頼んで、ばあちゃんの外出許可をとってもらった。心臓の悪いばあちゃんを心配して反対していたお母さんも、「年寄りの楽しみをう

「ばうのは親不孝！」と、ばあちゃんに強く怒られてしぶしぶ許してくれた。

「いい、ぜったいにばあちゃんに無理させない、何かあったらすぐ連絡する。分かった？」

「雄太くと健一くんは、ここに入所なされているみなさんの孫みたいなものです。」

元氣をもらっているんですよ。私たちも雄太くんたちの自由研究に、喜んで協力さ

せてもらいます。何かあったら、すぐに対応できるよう配慮しますから安心して下さい。」

とお母さんを安心させてくれたのは、若竹荘の所長さんや介護士の美菜子さんだ。

研究の一番目は、若竹荘に近い『大城商店』からだ。雄太も健ちゃんもこの日のた

めに、せつせと貯金にはげんできた。

「ばあちゃん、おれたちのおごり。おれたちお金持ちだから遠慮しなくていいよ！」

「ごちそうになろうねえ。もう口の中が魚てんぷらの準備をしているよ」

大城商店からはおいしい揚げものにおいがプンプン漂ってくる。ばあちゃんが言

ったとおりだ。二人の口もてんぷらを待っている。

「魚てんぷら、いっぱい下さい！」

あつあつの揚げたてだ。大城のおばさんは『外は暑いよ。クーラーきいてるから、お店の中で食べて!』と、お茶をこちそうしてくれた。帰り道の雄太と健ちゃんとはあちやんのお腹はあつあつで、なんだか心まであつあつだった。

ふたり
おもしろしように
二人は『☆大城商店

あつあつの魚てんぷらがおすすめです!』と、地図に書き込

んだ。

次は、小学校だ。雄太はあちやんの話を聞くまで、運動場の隅っこのデイゴの木なんてまったく気にとめなかった。落ち葉はすごいし毛虫はいるし、赤い花が咲いても「きれいだなあ」と、じっくり見たことがない。

ばあちゃんはなつかしそうにデイゴの木を見上げた。薄くなった手で大きなごつごつした幹をやさしくなでて、そつと耳をあてた。

「戦争でたくさん命が消えた島で、本当に大きく育ってくれて、ありがとう。命の水が流れているよ。聞いてごらん・・・」

「ばあちゃん、なんにも聞こえないよ」と、健ちゃんは言ったけれど、雄太の耳には空

をめぐらしてゴーゴーと水を吸い上げている音がたしかに聞こえた。

「ほんとだ、ばあちゃん、このデイゴの木、生きてるよ！」

それから二人は、地図に『☆ばあちゃんのデイゴ』何もないはだかの島で立派に生き

てきました！』と、大きな木を描いた。

公民館に向かう坂道はなだらかだ。ばあちゃんを乗せた車いすは重く、二人がかり

で力いっぱい押ししても、ズルズルすべり落ちてくる。夏休みももうすぐ終わりだとい

うのに日差しは厳しい。ばあちゃんが心配だ。なんだかグツタリしているように見える。

美菜子さんに迎えに来てもらおうか？

「おい雄太。お前たち、こんな所にはあちゃん連れ出して何しているんだ？」と、声が

した。部活帰りの兄ちゃんだった。

兄ちゃんはばあちゃんの汗をふき、いつも持ち歩いているスポーツドリンクを飲ませ

た。それから力強く車いすを押して、グングン坂道を上った。風が涼しい。ばあちゃ

んも元気を取り戻した。公民館の木陰で兄ちゃんはばあちゃんを車いすからおろした。

ゆつくり抱きかかえるようにして草むらを横切っていく。バツタが驚いてピョンピョン飛び跳ねた。

「昔とちつともかわらんねえ…あの川でエビ釣りをしたよお、洗濯物を草の上に干して、乾くまで川遊びをしたさあ。あつちの山にはバンシルーの木がいっぱいあってね、食べ過ぎてお腹をこわして母ちゃんに怒られたさあ。父ちゃんといっしょに馬車に乗って、あの農道通って畑に行つたよお。ナチカサヌ…」

「ばあちゃんは「おいで」と二人を呼んだ。」

「雄太、健ちゃん、ありがとうねえ。おかげで、後生のお土産話が出来たさあ」と、薄くなった手のひらで二人の顔をゆつくり撫でた。雄太はなんだか泣きたくなった。

『ばあちゃんの地図』が完成した。「☆モウ」村で一番大事な場所。昔が見えます。だから思い出がいっぱいです！」

夏休みが終わって秋になった。ばあちゃんはもういない。兄ちゃんは、時々思い出

たように雄太ゆうたに言うい。「おれたち、ばあちゃんとお別れわかしたよなあ・・・」
そうだ、あした健ちゃんけんと若竹荘わかたけそうに行こうい。宮城のおじいちゃんみやぎたちに本ほんを讀よんであげよう。それからモウに行いって、二人ふたりで相撲すもうをとるんだ。

(野原のほら せい)